

スタジアムの日常化 ー都市体験による日常空間の再生と非日常との同時存在ー

1250160 三好 修羅*1
指導教員 高野洋平

日常化 スタジアム 非日常
道 場所性 廃墟化

1. 社会背景

スタジアムの建設が高まる現代社会。しかし、スタジアムには経済的問題に伴い、廃墟化やスラム化といった社会問題を引き起こしている。一方、2024 年度のオリンピックは、本来あるスタジアムとしての機能は希薄化し、スポーツ競技がスタジアム外で行われることとなっている。

本来、娯楽施設としてのスタジアムは、年間利用数が50にも満たない中で、地域活性化を目的とすることが多く、まちとのつながりも密接に関わっているはずの建築ではないだろうか。



図 1 J.LEAGUE プロサッカーチームの年間試合数

2. 目的

本設計では、スタジアムを設計する地域の場所に焦点を当てることで、スタジアムの機能性にとらわれた現状を脱し、まちとスタジアムの一体化を目指す。そうすることでスタジアムが新たな日常の場となることが目的である。

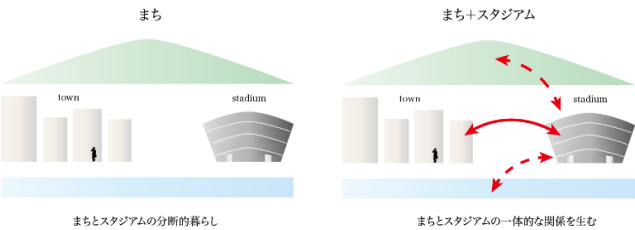


図 2 スタジアムの日常化

3. 対象敷地

敷地は高知県高知市棧橋通り 6 丁目に位置する元高知競馬場跡地を対象とする。周辺は工業地帯に囲われ、高知駅～棧橋通り線の路面電車終着点や高知港が隣接し、跡地にはわんぱく高知と元中高一貫校が建っている。



図 3 高知県高知市棧橋通り 6 丁目の航空写真 (国土地理院基盤地図情報をもとに作成)

3.1 歴史

棧橋通り 6 丁目は、地方競馬で栄えた歴史があり、現在は廃止となっている。都市計画制定時と現在を比べても一度は工場地帯に変更されるも、軍事資源保護法廃止により、再び商業地域として痕跡が残り続ける。

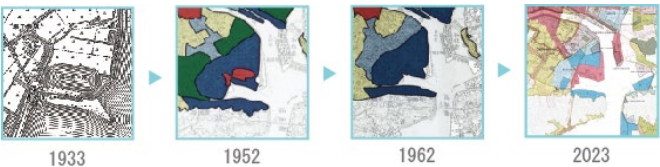


図 4 棧橋 6 丁目の都市計画の変化図

3. 2 現状

現在の棧橋 6 丁目は、高知港沿いに防災対策が活発化し続けており、歴史的関係性が希薄化し続けている現状

にある。以下に上げる3つの要素が該当する。

■路面電車と港

高知県伊野町から人や資源を高知港へ運ぶやく役割を担っていた路面電車は、高知港沿いに堤防が敷かれたことで港との関係が薄れる現状である。



図5 路面電車終着点の変化

■学び舎の閉校

競馬場跡地には中高一貫校が建設され、かつてオリンピック選手を輩出した歴史ある学び舎が建立していたが、防災対策とともに少子化問題が深刻化し、2023年度を目途に歴史の幕を閉じる現状である。



図6 閉校と化す旧高知南中・高等学校

■取り残される高知市制100周年の都市公園

学校が隣接していたことで学生にとって日常風景となっていた都市公園がある。都市公園内には動物園と遊園地が隣接しており、現在は学生の姿が消え、非日常の場として残り続ける現状である。



図7 わんぱーく高知

このような状況を見据えたまちの一部の人からは、新たにスタジアム建設が立ち上がっている現状である。

4. 提案

工業地帯に囲われ、商業地域であり続ける棧橋6丁目に対して、従来の閉ざされたスタジアムの提案では、負の遺産となることが考えられる。希薄化するまちの要素をスタジアムが建つことで、新たにつなぎなおす役割を果たし、その土地の場所性を帯びるスタジアムの提案をする。

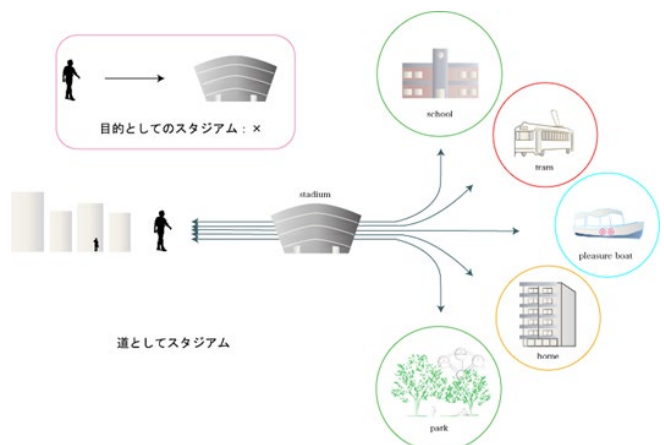


図8 道としてのスタジアム

5. 設計手法

5.1 スタジアム設計手順の反転

従来のスタジアム設計手法は主に、フィールドの配置から観覧席、動線計画へと進めている。本設計では、本来の設計手順を反転させる手法を取り、まちとのつながりを形成する。

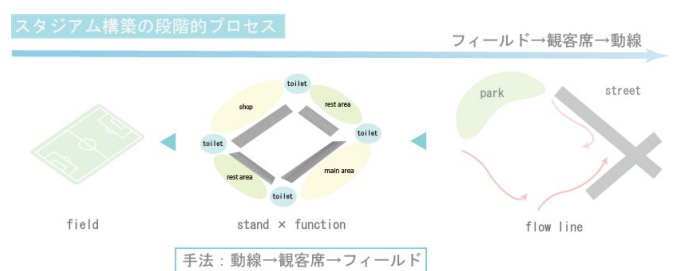


図9 スタジアム設計の段階的プロセス

5, 2 ボイド同士を共通接線の動線でつなぐ

まちにも様々なボイド性を形成する要素が隠れており、ボイド性を新たに転生、復元しなおし、スタジアム独自のボイド性となつたことで、スタジアムのボイド性に場所性が入り込む。

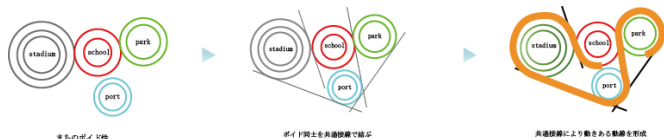


図 10 共通接線によるまちとの一体化

5, 3 表裏一体の動線

まちのボイド性同士はまちの現状においても、互いに共存できる関係にない。そこで、ボイド同士の共通接線による動線に対し、ボイド同士が互いに同時存在できる表裏一体関係を形成する役割を与え、場所ごとに動線の変化を与える。

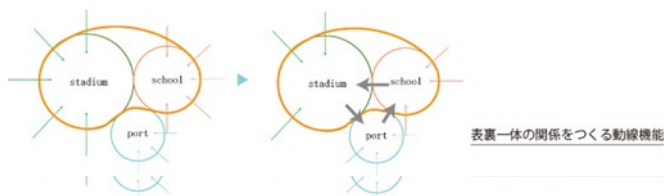


図 11 ボイド性同士をつなぐ動線機能

6. 設計

学校を起点に各々の場所で街に対して有効な転生を施す。各ボイド性では、囲われた空間を形成しつつも、遊歩道動線が一部囲いを負担することで、全体のつながりを生み出す。



図 12 全体計画

6, 1 公園と遊園地、動物園

公園の自然や音を感じながら居場所の形成とともに遊園地やまちと同時存在する。遊歩道は公園と遊園地、動物園同士の境界に入り込み、「分断」的な境界線は「つながり」の境界線となる。



図 13 公園と遊園地をつなぐ境界としての動線

6, 2 学校の食堂とまち

閉校した学校の食堂を街に対して開くことで、新たにボイド性を形成する。そこを取り囲むように歩廊が通り、食堂動線とまちの動線の2つに分岐することで、空間がまちと同時存在できる大屋根を形成する。食堂広場はプロ選手と人々の交流の場のきっかけを形成する。



図 14 食堂とまちをつなぐ大屋根

6, 3 高知港とまち

防災対策により堤防が敷かれた高知港は遊歩道により、もとある港の景色とともにまちの景色とつながる。遊歩道の下の空間は歩道の高さが徐々に変化するにつれ、

人々の居場所も同時に変化する。



図 15 もとある港風景と居場所の変化



図 17 学校に入り込む路面電車終着駅

6.4 まちとスタジアム

まちと学校の高低差は高知競馬場の痕跡に沿って緩やかにつながぎ、居場所を形成する。高低差により、まちの領域がスタジアム内まで入り込むが、スタジアムの風景は観客の歓声や選手の熱といった五感で同時存在する



図 16 まちとスタジアムの同時存在

6.5 駅とスタジアム

現在廃れた路面電車執着点を閉校した学内に導入することで、お互いが機能的に再生し合う関係を形成する。そこに遊歩道が入り込むことで、日常的に訪れる人とスタジアムの非日常といった場に訪れる人が有効的にまちに分散しお互いを認識し合う関係を形成する。

6. まとめ

スタジアムが日常化すること。それはスタジアムの形骸化を少しでも減らす1つの手段ではないだろうか。スタジアムのような非日常空間は人間の都合によってできたものであり、同時に需要が無くなれば、すぐ機能性を失い、消失するものでもある。現代は地域活性化やまちとのつながりを目的に日常化する動向が見受けられるが、どれも機能的な解決策であり、町の人には都合上の関係しか築けていないと考えている。まちにはその町のみのポテンシャルがあり、場所性を生かすスタジアムの提案を、これからのスタジアム建設が益々高まる中で期待する。

7. 参考文献

- 1) 世界スタジアム物語 競技場の誕生と紡がれる記憶
後藤健生（著）
- 2) 高知新聞社 2024. 02. 29
<https://www.kochinews.co.jp/article/detail/724641>
- 3) 国土地理院基盤地図情報
<https://www.gsi.go.jp/kiban/>
- 4) 高知の都市計画
<https://www.city.kochi.kochi.jp/uploaded/attachment/126229.pdf>